二次元ドリームノベルズ
18
未満
筑摩十幸
挿絵◉くろいわしんじ
原作◉桜沢大
アナスタシアと
7人の姫女神
ひめがみ
淫紋の烙印
試し読み版

登場人物紹介

アナスタシア

神々の国アスガルド王国を護る姫女神の一人で、主神オーディンの養女。幼い頃泉のほとりで倒れていたところをオーディンに拾われた。対巨人戦闘に特化したエリート部隊であるワルキューレヴァクターのクールな指揮官。幼げな美貌の持ち主だが、身の丈ほどもある覇剣「ヴィザール」を操り巨人を狩る最強の女神である。使用人だったロキに対しては侮蔑の感情を強く抱いている。

ブリュンヒルデ

神々の国アスガルド王国を護る姫女神の一人で、オーディンの実の娘。国のために尽力するアスガルド王国軍の将軍。妹のアナスタシアとの仲が冷え切っていることに悩んでいる。正義感が強く曲がったことが嫌い。真面目な優等生タイプらしく弱者に優しい清廉さを持つが、ロキのことは昔からちょっかいを出されていたので好きではない。

ロキ

人間と神族とのハーフである卑屈な男。呪われた存在として監視下に置かれ、ブリュンヒルデやアナスタシアの召使いをしていた過去がある。彼女たちにこき使われたことを逆恨みし、催眠と淫紋を駆使して復讐をしようと行動を始める。

第一話……007
第二話……069
第三話……137
第四話……206

第一話

大いなる世界樹ユグドラシルが世界を支配した時代。

二千年周期の後期、神々と巨人、そして人が最も栄えた時代。

惑星アースは、かつてない繁栄の煌めきで宇宙の闇すらも払拭せんばかりだった。

だが――――！

盛者必衰のサダメからは神すらも逃れられないのか。黄金の輝きを放った華もやがては落花し、命を終える時が来る。大いなる黄昏の刻が、今、邪悪なる胎動とともに近づきつつあった！

「ウオオオッ！　アスガルドのクズ神共、今日こそ積もりに積もった恨みを晴らさせてもらうぜっ」

「ユグドラシルは俺たちのものだぁ」

荒れ狂う海に浮かぶ巨大な軍船の群れ。その数は百隻はくだらないだろう。そこから巨人兵たちが一斉に海に飛び込み、岸に向かって進軍を開始した。

巨人族は人間の十倍ほどの巨躯を誇る。押し寄せる波をものともせずに突き進む様は、生きた津波といった感じだ。

「おのれ巨人共、いつの間に!?」

「やつらをアスガルドに近づけるな！　撃て、撃てぇ！」

海岸には堅牢な砦が作られており、そこから盛んに砲撃が行われるが、屈強な肉体を持つ巨人にはほとんど効果がない。

「フハハっ！　お前らみたいなカスにこのロキ様を止められるかよぉ」

その兵団を率いていると思われる男が声高に叫んだ。その名はロキ。

派手な鎧でいきがってみせるものの、頑健な巨人族の中において、ロキだけは貧相な身体つきであまり強そうに見えない。手足は細く全体的に痩せているくせに、腹だけは無様に出ている。ただ大きくなっただけの中年男といった風体がなんとも不格好だ。

「くそ、ロキだ。アイツを狙え！」

「守りの弱いここを狙うとは、裏切り者め、死ね！」

ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！　ドドンッ！

そのロキに向けて集中砲火が開始された。ロキはかつてアスガルドに属していたが、度重なる悪事で追放され、今は宿敵である巨人族に寝返ったのだ。そのぶんアスガルド兵か

らも怒りを買っていた。

「う、うおっ！　あぶねえ！　ちくしょぉぉっ！　こうなったら容赦しねえ！　出でよ、魔獣共！」

ドドドドドドドドッ！

ロキの呼びかけに応え、群青の水面を押し分けて、二頭の巨獣が海中から出現した。

一頭は黒光りする鱗に覆われた長い胴体をくねらせる大蛇で、胴回りは丸太を数十本束ねたほど太く、体長はその大半を海中に没しているが一里にも達するだろう。

そしてもう一頭は、燃え盛る炎のようなたてがみを持つ狼だ。ぎらりと光る銀色の牙は鋼を易々と噛み砕き切り裂きそうなほど鋭く、おそらく象でさえも一呑みできてしまうのではないだろうか。

「あ、あれは……魔狼フェンリルと……だ、大蛇ヨルムンガンドじゃないか……⁉」

神兵たちの間に戦慄が走る。彼らはこれまでも多くの神族を屠ってきた、最大最強の魔獣なのだ。数年前の闘いで葬り去られたはずだが、まさか復活していたとは。

「今日でお前らはおしまいだっ！　やっちまえ！」

「キシャアアァァッ！」

二頭の魔獣が同時に炎を吐き出す！　二本の火柱が絡み合いながら、超高熱の矢となっ

て砦に突き刺さった。
ドッゴォォォンッッ！
大地を揺るがすほどの大爆発が起こり、火山が噴火したような黒煙が雲を突き抜けるほど高く、濛々と上がる。
「く……なんて火力だ……」
「これ以上は、もたないぞ……」
神聖なる力に守られている砦であったが、城壁はボロボロにひび割れ、崩壊寸前だ。神兵たちは青ざめ、目前に迫った死の恐怖に震え上がった。
「ガハハッ！　そぉれ、もう一発だぁ！」
再びヨルムンガンドとフェンリルが攻撃の態勢に入る。大きく開かれた口から、赤い炎の塊がゴオォッと吐き出される。
「させませんっ！」
バッキィ――――――――ンッ！
その時、神々しい光の壁が砦の前に立ち現れ、炎を弾き返した。
「グギャァァッァァッ！」
跳ね返された火の玉はそのまま二頭の魔獣を直撃、灼熱の爆炎がヨルムンガンドとフェ

ンリルの頭を吹き飛ばす。
ズドォォンッ！
魔獣の身体は大爆発を起こし、真っ白な水蒸気が霧のように拡がった。
「た、助かった……のか？」
「ぬう、あの二頭が一瞬で……何事だ」
敵も味方も、何が起こったのかわからず一瞬呆気にとられる。
やがて濃密な霧のベールを押し開けて、輝かしい一筋の光が現れる。その中心には美しい少女神の姿があった。
「邪悪なる巨人たちよ。これ以上アスガルドの地を穢(けが)すことは、このブリュンヒルデが許しませんっ。今すぐ呪われし北の大地に帰りなさいっ」
風にたなびく優美な金髪、サファイアのような碧眼(へきがん)は美しくも鋭い光を放って、自分の何倍もある巨人の男たちを怯ませる。スッと通った鼻筋や柔らかな曲線を描く眉からは、おそらくこの世に生を受けた時から身についていたであろう高貴な血筋と精神性が垣間見える。桜の花弁のように可憐な唇は、峻厳な言葉を放ち、その女神がただ美しいだけの存在ではないことを物語っていた。
「オオオ……あれが、アスガルドの女神、ブリュンヒルデか」

「噂通りの霊圧……眩しいくらいだぜ」
そこから先へは一歩も進ませないという絶対の意志が、見えない壁となって巨人たちを押し返す。それまで神軍を圧倒していた巨人の軍勢が、たった一人の女神によって立ち往生していた。
「ぬう……貴様っ！」
ロキの血走った眼球が、ギロリと空の一点を睨む。
彼女の実力は最高神オーディンをも超えると言われる、神聖アスガルド王国軍最強女神の一人。悪を断罪する神剣『フォルセティ』は、法と秩序を愛する彼女の正義の心を象徴する神器である。同時にその美しさにおいても並ぶものなしと言われ、敵対する巨人族ですら見とれてしまい、闘いを中断してしまったという逸話が残るほどだ。
「ブリュンヒルデェェッ！」
ロキの醜い表情に、それまで以上の憎悪が色濃く浮かび上がる。こめかみの血管が脈動し、今にも血を噴き出しそうだ。
「静まりなさいロキ！　かつては私たちの同胞だったというのに、おぞましい巨人の力を借り、アスガルドに刃を向けるなど……なんて愚かなことでしょう。あなたにはプライドというものがないのですか」

透き通る美声は暴風の中でも鼓膜に届く。厳しい口調の中に凛とした高貴さが、聞く者の魂を揺さぶらずにおかない。

「く、くそ……またお説教かよ。昔からお前はそうだった。くそまじめで、お高くとまって、いつもいつも俺を馬鹿にしてよぉ」

べっと唾を吐き捨てたロキがブリュンヒルデにジリジリと迫った。身体から滲(にじ)み出す憤怒のオーラが、吹きつける北風をも跳ね返す。

「それはあなたの誤解です。私は誰も侮辱などしていません」

静かな口調で相手を説得しようとするブリュンヒルデ。しかし怒りに狂うロキに、その冷静さは却って逆効果だったか。

「いいや。人間の血が混じっている俺を嫌って蔑んでいたんだろ。他の連中と同じようになっ！　俺だって、心の底では姫様のことを……」

ぎらつく瞳が美しき女神を睨む。瞳孔の奥には、憎悪とも愛情ともつかない複雑な色が渦巻いていた。

「私は純粋な神族であり、あなたは人の血を持つデミゴッド。この壁を越えたいと欲するならば、それ相応の努力が必要です。それをあなたがしたとは思えないのですが？」

辛辣な言葉はロキの一番痛いところを突いたらしい。見る見るロキの顔が赤くなる。

「うう……だ、黙れぇ。くそっ、お前たち！　このいけすかない高慢女神をやっちまえ！」
「オオッ！　女神なんぞ、軽く捻ってやる！」
「ブリュンヒルデ、覚悟しろよぉっ！」
それまで背後で構えていた巨人たちが、一斉にブリュンヒルデに襲いかかる。無数の斧や剣や槍が突き出され、それは巨大な銀色の激流が押し寄せるかのようだった。
「身の程を知りなさいっ！　法の神フォルセティの名の下に神罰を下しますッ！」
キュアァァッ！
戦女神の背中で輝く四枚の翼が、エメラルド色のオーラを纏って、力強く打ち振られた。しかし気合いの声とは裏腹に、巻き起こったのは小さな旋風。
「へっ、そんなもので俺たちが……うぉあっ⁉」
風は急速に発達して、二本の巨大な竜巻と化していた。そのまま暴龍のごとく巨人の軍勢を呑み込んだ。
「ぐぎゃあぁぁっ！」
「ひいいっ、腕がぁぁぁっ！」
吹き飛ばされ、もみくちゃにされ、叩きつけられたところに、真空の刃が襲いかかる。斬り込み隊として先頭を走っていた三十人ほどの巨人兵たちは、一瞬にして戦闘不能に追

い込まれていた。
「ぐわあああ、なんて威力だっ」
「こ、これが女神ブリュンヒルデの力なのか」
荒くれ者の巨人たちも勢いを失い、顔面蒼白だ。これほどの力の差を見せつけられてはムリもないだろう。
「う、ううう……ば、馬鹿な……こんなあっさりと……」
兵力の三分の一を壊滅させられて、ロキも嗄れた声を絞り出すのが精一杯という様子だ。
「武器を捨てなさい、ロキ。これが最後です。今ならばまだ偉大なるオーディン様の慈悲も受けられるやもしれません……」
燃える瞳で最後通牒を突きつけるブリュンヒルデ。燃え盛る正義の意志と、それを包み込む理性の冷静な煌めき。相反する二つを己が裡に昇華させ、力へと変える。それがブリュンヒルデの闘い方だ。
「う、うるせえよ！　俺はユグドラシルを手に入れて、オーディンに復讐してやるんだぁ」
「……仕方がありません……その穢れた霊魂のすべてを因果律の牢獄に永遠に封じ込めてあげますっ！」
大きく振りかぶったトドメの一撃がロキめがけて、大上段から叩きつけられようとした、

その時。
「ま、まてぇっ！　これを見ろっ、ブリュンヒルデッ！」
ロキが背嚢から鳥籠のようなものをサッと取り出す。その中には人の姿のようなものが見えた。
「ッッ――――――人間⁉」
「ブリュンヒルデ様！　お、お助けくだせえ」
「女神様ぁ！　おねげえしますだぁ！」
狭い籠の中で三人の男たちが助けを求めて藻掻き苦しんでいる。このまま攻撃すれば間違いなく被害が及ぶだろう。
「そうだぁ。ここに来る途中、見つかりそうになったんでなぁ、漁師のやつらを捕らえたのだ」
「くっ……罪もない人を……なんて卑劣な……っ」
ブリュンヒルデは苦虫を噛み潰す表情で、剣を止めた。軍の指揮官としてなら、小を殺して大を取るのが正しいだろう。しかしブリュンヒルデにはそれはできなかった。
「はあっはあぁっ……へへへ……やっぱりな……お前は昔から優しかったからなぁ」
卑劣な作戦が功を奏して、ロキは余裕を取り戻す。

「まったく、あまちゃんの女神様だぜ……くくくっ……さあ、武器を捨てるんだ。もちろん鎧もなぁ！」
「く……」
「ブリュンヒルデ様、なりません！」
「人間のために姫様がそんなことを……」
「良いのです。民の命を救えるなら、これくらいなんともありません」
神兵たちは止めようとするのだが、ブリュンヒルデの意志は堅い。剣を投げ、続けて甲冑の胸元に手をかける。
「……っ」
一つ深呼吸の後、ガシャンッと重々しい音を立てて、ミスリルの装甲が地面に落ちた。鎧の上からは気づかなかったが、シルクのインナーに包まれた二つの乳果のボリュームに目が釘付けになる。スレンダーな身体に不釣り合いなほど豊満な双乳はFカップはあるだろう。重力に負けずにツンと上向いているのは、やはり若さの特権か。
「おおおっ……ブリュンヒルデのオッパイ……やっぱり結構でかいんだな。ほれほれ、下の鎧も外せよ。さもないと……」
「……わかっていますっ」

人質の籠を揺さぶられて、ブリュンヒルデは覚悟を決める。戦慄(おのの)く指先で腰の革ベルトを緩めると、スカート状の装甲が太腿にそってずり落ちた。するとロキだけでなく巨人族の間からも「オオッ」というどよめきが起こった。

ほの白い太腿は鍛えられた筋肉と柔らかな皮下脂肪とが絶妙のバランスで混ざり合い、少女らしい健康美を醸し出している。うっすらと浮かぶ腹筋の縦筋に続くのは形の良いお臍。その下のデルタ地帯を隠す小さな三角の布地には縦に走る一本の皺が刻まれており、想像をかき立てずにはおかない。

「うう……っ」

無数の視線に貫かれ、さすがのブリュンヒルデも頬を赤く染める。

本来神族にとって肉体の価値はさほどではない。しかし人間族との交流も重んじるブリュンヒルデには、人間の持つ肉体感覚、それに伴う羞恥心も身についていたのだ。

「恥ずかしいかよ、お姫様」

「く……我ら王国軍の使命は、アスガルドのすべての生命を守ること。そのためならこの程度の屈辱など、何も感じません！　見たければいくらでも見ればいいのです」

毅然とした態度を崩さない。しかし言葉と裏腹にブリュンヒルデの身体は羞恥に赤熱し、背中や腋にじっとりと汗が噴き出してきた。高貴な戦女神であっても、やはり一人の女の

子なのだ。
「いいねぇ、さすがブリュンヒルデ様だ。それじゃあ、その下着も脱いでもらおうか。へへへ、武器を隠しているかもしれないからな」
「な……そ、そこまで⁉　なんて卑劣なッ」
「うるせえ。人質がどうなってもいいのかよぉ」
「そうだそうだ、脱げよ」
「女神様のストリップショウだ！」
ロキが勝ち誇ったように嗤い、巨人兵たちも調子に乗って囃し立てた。
「くっ……わかりました……あなたの望み通りにしましょう」
耳まで赤く染めながら、ブリュンヒルデは両手を背中に回す。ゴクリと飲み込む唾が喉に引っかかるのを懸命に飲み下す。
「法と秩序の女神である私に、このような屈辱を味わわせたこと、必ず後悔することになるでしょう！　覚悟しなさい」
背中で結んだ紐がほどけ、ブラがゆっくりとずり落ちる。
鋭い山嶺のように隆起する白い肌、その頂点にある突起を取り囲むピンク色の乳輪が少しずつ見えてきた。

「ホォオオオオッッ！　ブリュンヒルデのオッパイィィィッ！」
昂奮でグッと身を乗り出すロキ。その時――――――――――。
「一体何を手間取っているのですか？」
ドズンッッ！
「ぬぁ？」
鈍い音がして、ロキの動きがピタリと止まった。
「なんの音らぁ……あへっ？」
ブッシャアアアァァァッッ！
グラッとロキの巨体が傾いだ直後、額がパックリと割れ、滝のような勢いで鮮血が噴き出した。
「うひいいいいっ！　なんだこれ⁉　血がぁぁぁぁぁっ！」
ズゥウウンッッ！
そのまま仰向けにひっくり返り、血しぶきと水しぶきが盛大に上がる。周りの巨人たちも何が起こったのか理解できず、慌て狼狽えている。
「うぉっ……見ろ！　あれは……⁉」
一人の巨人が指さす先には、黒を基調とした鎧を纏った少女の姿があった。

プラチナのように輝く銀髪が特徴の美少女は、見た目は幼く、まだ初潮前の生娘のように胸の起伏もほとんど目立たない。身体つきも華奢（きゃしゃ）で、四肢も強く抱けば折れてしまいそうなほどほっそりとしている。

身につけている衣装も愛らしいレースが飾る漆黒のゴシックドレスで、装甲などはごく一部。とても戦場には似つかわしくない出で立ちだ。

しかしその内面に秘めたオーラは絶大。何よりも背中に光る六枚もの翼が桁違いの霊力を誇示している。

「哀れな劣等種族よ。大いなる神の力を思い知りましたか」

小さく可憐な唇が、冷徹な言葉を紡ぎ出す。紫水晶（アメジスト）のような瞳は怜悧に輝き、自分の十倍はあろうかという巨人の軍勢を眼下に見下していた。

「あ、貴女は……アナスタシア……」

「……無様ですよ、ブリュンヒルデさん」

ブリュンヒルデに対しても冷たい声を投げかけ、身の丈ほどもある大剣をヒュンと一振り、血を飛ばす。

「こんな人間混ざりの雑種相手に苦戦するなんて、四枚の翼は飾りですか？　やはり王国

軍はふぬけの集まりのようですね」
辛辣な言葉は、仲間であるはずの王国軍神兵たちにも向けられた。もっとも、その神霊圧におされて、反論できる者は一人もいなかったが。
「それは……人質がいたからです」
「人質？　それこそ笑止。非論理的かつ非合理的な思考です」
冷たい目線を味方であるはずのブリュンヒルデに向けるアナスタシア。
そのアナスタシアを護衛するように武装した女神たちが次々に出現する。身を包むのはお揃いの黒い甲冑。霊力を極限まで研ぎ澄ませた女神たちからは、有無を言わせない威圧感が殺気とともに押し寄せてくる。
「うっ……あれは……ワルキューレヴァクター……」
その気合いに圧倒され、同じ神族である王国軍神兵たちも息を呑んだ。
「ワルキューレヴァクターの指揮権はすべて大神オーディンに帰属する。よって人間族の人質の有無は考慮に値しない！」
黒鎧の女神たちが声高に宣言する。ワルキューレヴァクターはオーディンを守護するために作られた少数精鋭の戦闘部隊であり、国を守る王国軍とはまったく異なるのだ。
「我々はオーディン様以外の何モノにも縛られない！　倫理も信義も法も！　我々の行動

原理の彼岸にあることだ！」
　彼女たちの言葉自体も、まるで鋼鉄でできているかのような重く硬質な響きでブリュンヒルデたちを圧した。
「でも、ここは我々王国軍の所轄です。貴女たちには私の指揮下に入って……」
「言ったはずです。ワルキューレヴァクターに法は無関係だと。何より巨人が相手ならば、私たちのほうが適任です」
　目も合わせないまま、冷たい口調で言い放つアナスタシア。
「でも……そ、それでは人質が……民を見捨てるなど……」
「アナスタシア様が仰るのだ。手出しは無用！」
「なにを！　姫様に対して無礼だぞ！」
　睨み合う王国軍とワルキューレヴァクター。一触即発のような張り詰めた空気が辺りを包み込み、巨人たちも近づきがたい異様な状況となった。
「ぐろろろぉぉぉっ……てめえら勝手に話してんじゃねえぞ……うああっ……お、お前はぁぁっ！」
　静寂を裂くように、頭の傷を再生させたロキが髪を振り乱して海中から立ち上がった。だが……。

「ぐお……ア、アナスタシア……お、お、お嬢様……いや、アナスタシア……っ！」
アナスタシアの顔を見て後ずさる。その顔に浮かぶのは恐怖か畏怖か。
「私の名を呼ぶなど馴れ馴れしいですよ……元使用人の分際で」
銀髪の女神が語気を強める。
「私の小間使いだったあなたが、このアスガルドに弓を引くとは、無礼千万。どうやら躾が足りなかったようです」
幼げで可憐な唇が、人間で言えば自分の父親ほども年が離れた男に、辛辣な言葉を浴びせていく。
「私の前に跪きなさいロキ。そうすれば命だけは助けてあげましょう」
アメジストの瞳は自分の数倍も大きな巨人の男を睥睨し、見下し、圧倒する。絶対的な支配者の風格を纏って……。
「う、う、うるせえ。俺はもう昔の俺じゃねえ。お、お前も、オーディンのクソじじいもぶち殺してやるから覚悟しろっ」
「お黙りなさい、野良犬ッ！」
ジャキンッ！
大剣の切っ先をロキに向かって突きつける。ミスリル金属の剣はかなりの重さのハズだ

が、アナスタシアはそれを細腕一本でタクトを振るように軽々と扱う。
「私はともかく……神族の象徴たるオーディン様を侮辱するとは……やはり愚か者に慈悲は無用」
聖なるオーラが殺気に染まり、冷たい視線は氷の刃のように、哀れな生け贄を見下す。滅多に感情を出さない彼女が、怒っているのである。
普段が物静かなだけに、そのギャップの大きさに、ブリュンヒルデたちも寒気を覚えるほどだ。
「……人間などという穢れた血肉を受け継いだのがあなたの最大の不幸。二度と不遜な口をきけないよう、消し去ってあげましょう。冴えよ、覇剣『ヴィザール』……光力最大顕現っ！」
巨大な剣を頭上にサッと掲げると、まばゆい光が天空に向かって放たれた。
「アナスタシア……！　あ、あれは究極奥義の構え⁉」
漆黒の女神の体勢を見たブリュンヒルデが表情を強張らせた。
「やばいぞ、離れろ！」
それを聞いたワルキューレヴァクターの兵士たちが血相を変えて飛び去る。
「く……っ。皆さんも急いで砦の中へ。彼女が本気なら、ここも無事では済みません」

「うわぁ、そんなぁ……っ」
ブリュンヒルデに言われて、王国軍神兵たちも慌てて砦の奥へと避難を始める。
「し、しかし、ブリュンヒルデ様は？」
「私は外から砦を死守します。法の女神として、まだやるべきことがありますから」
ブリュンヒルデはニッコリ微笑むと、睨み合うアナスタシアとロキとの間に向かって全速力で飛翔する。四枚の羽が光の尾を引いて、流星のように空を駆け抜けた。
「くそおおっ、俺は伝説の巨人の力を手に入れたんだ。もう、お前なんかに負けるかぁぁぁっ」
「戯れ言を……思い知りなさい、己の非力さを！　愚鈍さを！　そして巨人など神族の足もとにも及ばぬ矮小な存在だということを！　ハアアァァッ！」
アナスタシアの上空のみ雲がかき消えて、紺碧の空がぽっかりと拡がった。六枚の翼が放射状に拡がり、降り注ぐ陽光を吸収する。
その姿はアナスタシア自身が可憐な花になったかのような美しさだった。
「究極奥義！　『ウルティマ・ソルレゥス』!!」
銀髪が大きくたなびき、アメジストの瞳がカッと見開かれる。無慈悲なる断罪の大剣が一直線に振り下ろされた……！

ンンンッッッッ！

次の瞬間、数百という灼熱の光条がシャワーのように降り注ぎ、ロキの身体を貫いた。

「うっぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

光線は大地を融解させ、大気をプラズマ化し、ありとあらゆるモノを焼き尽くしていく。

さらに深く岩盤を抉り、地下水を水蒸気爆発させ、地殻にまで亀裂を生じさせた。

ズッドォォォォンンッッ！

音速を超える衝撃波が同心円状に拡がり、周囲の森や林をなぎ払う。

「ぐわぁぁぁぁぁっ！」

ロキもろとも巨人の軍勢を辺りの空気ごと吸い込み、圧縮された熱線と爆風が、今度は逆方向へと吹き飛ばす。

ドドドドドドッ！

真っ赤な炎塊を孕んだキノコ雲が見る見る高く成長、ついには成層圏にまで達して、全天を夕日よりも紅く染め上げた。まさに天変地異クラスの超破壊力だ。

「任務完了です。たわいのない」

一撃で巨人の軍勢を葬り、アナスタシアは愛剣ヴィザールを背中に納めた。まだ剣から

は燃えるような熱気が放たれているが、まったく意に介さず、幼げな美貌は汗一つかいていない。
「……な、なんて威力だよ」
「姫様はご無事なのか」
ブリュンヒルデの聖なる力で守られた砦はかろうじて原形をとどめていたが、爆心地には直径一里にも及ぶ真っ赤なクレーターが噴火口のように口を開け、ドロドロの溶岩が中を満たしている。
もはや誰も生存できないと思われた、その中に――――――。
「あっ、ブリュンヒルデ様だ」
「おおっ！　良かった、ご無事で！」
四枚の翼をはためかせて近づいてくる女神の姿を見つけ、歓喜の声を上げる兵士たち。
「ふう、心配かけてごめんなさい」
光のフィールドに包まれた人間の人質たちの姿もそこにあった。あの爆発の中、砦を守護しつつ、籠から救い出したのだろう。
「無事だったのですか」
九死に一生と言える状況から帰還した姫君に対して、アナスタシアはいつも通りに冷静

なまま。
「ええ。民を守るのは私の責務ですから」
「人質はともかく、それはなんですか」
アナスタシアが顎をくいっと上げる。
「うううう……」
人間たちの後ろに、ボロボロになったロキの姿もあった。通常サイズに縮んでおり、もはや完全にグロッキーだ。
「ロキ⁉　そいつも助けられたのですか」
驚いたことにブリュンヒルデは裏切り者のロキまでも救出していたのである。
「おのれ、ブリュンヒルデ。貴様、アナスタシア様の高貴なる粛正を、穢したな！」
「アナスタシア様。追撃の許可を！」
ワルキューレヴァクターの女神たちが怒りの形相でブリュンヒルデを取り囲む。
ブリュンヒルデを守る王国軍も一歩も退かず、再度睨み合う女神たち。
「静まりなさい」
アナスタシアの凛とした声が、怒り心頭の部下たちを制した。
「人間のみならず、そんな男の腐敗した命まで救ったのですか？　一歩間違えれば貴女も

蒸発していたというのに」
「相手がどんな卑劣漢でも、法に従い処罰する。それがオーディン様より遣わされた私の務めですから」
毅然と言い返すブリュンヒルデ。青い瞳は正義の炎を煌めかせ、彼女の精神の潔癖さを物語る。
「……その甘さ。いつか貴女の身を滅ぼすことになるでしょう。そうならないことを祈っていますよ」
冷えた声で呟いた後、アナスタシアは銀髪をたなびかせてクルリと踵(きびす)を返す。漆黒のゴシックドレスがふわりと優美に舞った。
「それはどういう意味ですっ、アナスタシア！」
「……巨人共は全滅したようですね」
質問には答えず、銀髪の令嬢は焼け野原となった大地と蒸発した海を睥睨する。真っ黒に焼け焦げた巨人の骸がブスブスと煙を上げて、それ自体が彼らの墓標のようだった。
「それ以外に私は関心ありません。後始末はお任せます。では、これにて失礼」
アナスタシアは少し呆れたようにため息をつく。そして六枚の翼を打ち振ると天空へと飛び立った。ワルキューレたちもそれに続いた。

「ブリュンヒルデ様の妹だからって、なんて態度だ……」
「シッ、声が大きいぞ」
「……」
残された王国軍兵士が不満そうにぼやくのをブリュンヒルデは沈痛な面持ちで聞いていた。そう、アナスタシアはブリュンヒルデの妹なのである。だが、一体いつからだろう。妹との関係がギクシャクしてしまったのは。
「とにかく……」
キッと顔を上げて気持ちを切り替える。
「一旦城に戻りましょう。この男にも聞きたいことがありますし」
神々しい翼を拡げ、女神たちが飛翔する。しかし彼女たちは気づかなかった。既に恐るべき陰謀が張り巡らされていたことに……。

アスガルドを治める大神オーディンの居城、ヴァルハラ宮殿。
高次に存在しており、普段は正門以外人の目に触れることもない、神々の住まう地なのである。
「皆の者大儀であった。これで巨人の奴らも我が神族の偉大さを思い知ったであろう」

長い髭を手で梳きながらオーディンが満足そうに頷く。
かつては巨人族から鬼神と怖れられるほどの猛将であったが、年老いた今は心優しき王として政治に専念している。それでも肉体はまだまだ衰えず、腕や胸板の筋肉は逞しく盛り上がっている。
「特にアナスタシアとブリュンヒルデ、見事であったぞ。そなたらのおかげで、今回も『ユグドラシル』は無事守られた」
オーディンをはじめ、女神たちは玉座の背後に生え伸びる巨木を仰ぎ見る。
一体どれだけの時を年輪に刻んだのか、幹の太さは巨塔と言っても良いほど。天を覆い尽くす程の枝振りは、延々と分岐を繰り返し、まさに生命の大河を表しているかのよう。
ユグドラシル。それはアスガルドの大地を支える生命の大樹である。それから放出される無限のエネルギーは、人も神も潤し、アスガルドを繁栄させていた。かつては巨人の国ニブルヘイムにもあったが現在は失われ、その貧富の差が騒乱の元ともなっていた。
「ハッ。有り難き幸せ」
「はいっ。ありがとうございます」
静かに頭を下げる女神姉妹。いつもは無表情のアナスタシアも僅かに唇をほころばせている。

「だが今後も巨人族の侵攻が予想されておる。油断することのないようにな。ところでロキはどうしておる、ブリュンヒルデ？」
「現在地下牢に投獄しています。いずれは魂を隔離され、処刑される予定です」
「哀れな男よ。だが聞くところによれば巨人族の異能力を使ったとか。奴め、一体どのようにしてそんな技を身につけたのか……」
「その件に関しましては、尋問を続けています。しかしなかなか口を割らず……すみません」
「悠長なことを。もっと厳しく拷問にかけてやればいいのです」
ブリュンヒルデの言葉をアナスタシアがキツイ口調で遮った。
「しかし捕虜の扱いは法に基づいてやっていますから……」
「いずれ処刑される男に慈悲など無用です。オーディン様とユグドラシルの安全を優先するべきでしょう」
「うう……でも……」
厳しい表情で睨み合う金髪の姉姫と銀髪の妹姫。ここでも二人の意見は激しく対立した。価値観、モノの考え方が根本から異なるのだから仕方のないことではあるが……。
「まあ、待て。あと一日だけブリュンヒルデに任せよう。それでもダメなら、その時はア

ナスタシアに代わる。それで良いな」
「はい、お父様」
「御意に……」
なんとかその場をおさめ、やれやれと言った表情を浮かべるオーディンだった。

「アナスタシア……どうして……？」
階段を下りながらぽつりと呟くブリュンヒルデ。かつては周囲が羨むほど仲の良い姉妹だったのに、今の関係は冷めきっている。原因がわからないだけに、形容しがたいモヤモヤが胸に渦巻く。
「やっぱり私が姉として頼りないせいかしら……？」
ため息をつくと背中の四枚の翼が力なく垂れる。翼の数だけではない。剣や魔法の実力においてもアナスタシアのほうがブリュンヒルデを上回っているだろう。そんな自分に嫌気がさしてしまったのかもしれない。
「そうよ。私がもっと頑張らないと！」
パンッと頬を叩いて、ブリュンヒルデは気合いを入れ直した。

「ロキ、出なさい」
牢獄に向かってブリュンヒルデが声を掛けると、ロキがのろのろとベッドから身を起こした。
「私が許可するまで誰も入らないように」
守衛を遠ざけて単身牢獄に入るブリュンヒルデ。これから法に背くような尋問をしなければならないと思うと気が滅入るが、今は非常時だ。
「俺と二人きりになりたかったんですか、へへへ」
「お黙りなさい！」
減らず口を叩くロキの頬をバシッと張り飛ばす。
「今日はいつもの私とは違います。覚悟してください」
「へっ、すごんでも無駄だ。お前のことなんか、全然恐くないんだから……ぎゃあっ！」
再び平手打ちが炸裂する。神霊力を乗せた打擲（ちょうちゃく）は、見た目以上に重く骨の髄にまで響くのだ。
「ぐはあっ……お、おお……顎が……」
「お前に巨人の力を与えたのは誰ですッ？　どこにいるのですッ？　言いなさい！」
バシッ！　バシッ！　ビシィッ！

「ひっ、ひぃっ！　助けて！　姫様、お許しを！　ぎゃあっ！」
唇が切れ、鼻血が噴き出し、ロキの顔面は朱に染まる。しかしブリュンヒルデは手を休めず、力任せにロキを打ちのめす。
「ハア、ハア……」
やがて手が痺れてきてブリュンヒルデは手を止めた。だがロキはボロ雑巾のように床にグッタリと横たわったまままったく動かない。
「ロキ……？」
「う、うう……く……苦しい……息が……」
肩を揺さぶると、ロキが苦しそうな呻き声を漏らした。顔面は蒼白で全身をガクガクと痙攣させている。
「どうしたのです⁉　どこか具合が悪いのですか」
やりすぎてしまったのかと、心配になったブリュンヒルデがロキの顔を覗き込む。その時だ――――
「かかったな、『ハック』‼」
ロキの両眼がカッと見開かれ、まばゆい閃光を放つ。網膜に吸い込まれた光は、呪術となってブリュンヒルデの中枢神経を瞬く間に侵食する。

「ッ!?」

気づいた時にはブリュンヒルデの身体はロキのそばに跪いたまま硬直し、指一本動かせなくなっていた。

（なに……これは……!?）

瞳術の一種だろうか。自分の意思が神経を伝わらない。それにしてもたかが亜人のロキが、女神である自分を押さえ込むなどあり得なかった。

「へへへ、やっぱりお姫様は甘ちゃんでしたなぁ。ヒヒヒ」

平然と起き上がったロキが、勝ち誇ったように嗤う。余裕のせいだろう、かつて使用人だった頃のような敬語を使って、皮肉っぽく語りかけてくる。

「うう、騙すなんて……卑怯者」

「騙されるほうが悪いのですよ。これが『ユミル』の肉を食らった俺の能力です」

「うう……ユミルですって……!?」

その名を聞いた途端冷たい寒気が背筋を這い上がってきた。

伝説によると、ユミルとはかつてこの世界の原初に出現した太古の魔神である。初代のオーディン、ヴィリ、ヴェーの三人によって倒され、その肉によってこの世界が構築されたと言われている。だがあくまでも神話であり、それが実在したかどうかはアスガルド神

族の間でも意見が分かれている。
「そんなモノを……どこで……」
掠(かす)れ声を絞り出す。捕らえたロキの身体検査はもちろん厳重に行われている。怪しいモノを持ち込むなど絶対に不可能だ。
「フヒヒヒ。そいつはいずれわかることですよ」
話をはぐらかし、ロキはニヤニヤと嗤うばかり。
「わ、私をどうするつもりなのです？」
「姫様には俺の計画のための、手駒になってもらいますよ」
残虐にぎらつく瞳がグニャリと歪む。
「ユグドラシルも、姫様たちも、ヤツの大切なモノをすべて奪ってやる。俺を追放したオーディンに復讐してやるのさぁ」
「お父様に……ふざけないで！　だ、誰があなたに協力などするものですかッ！　それにこの術だって、破ってみせます」
碧眼がキッと相手を睨む。身体の自由を奪われているからといって、ロキの思い通りになるつもりはない。
「せいぜい頑張ってください。ヒヒヒ」

ロキが両膝をついたブリュンヒルデの前に悠然と仁王立ちする。そしておもむろにズボンをずり降ろした。

「きゃあっ！　何をするんですか⁉」

顔の真正面に男性器を突きつけられて悲鳴を上げる金髪の姫。だが相変わらず身体の自由は利かず、目を瞑ることも顔を背けることもできない。

（なんて穢らわしい……）

男性経験のないブリュンヒルデにとって初めて見る男根は、見るもおぞましい醜悪な怪物に見えた。暗紫色の肉棒はヌルリとした亀頭部の先端が縦に割れ、ジクジクと不気味な粘液を垂れ流している。胴部は握っても指が届かないくらい太く、長さも大きめのニガウリくらいある。野太い血管が這い回る海綿体が荒々しく脈打つ様は、絶倫の精力を誇示しているかのようだ。異性の知識がないブリュンヒルデでも、それが平均を遥かに超える巨大さであろうことは理解できた。

「へへへ、まずはフェラからお願いしますよ」

言い放ったロキが肉棒をグイッと突き出す。

「フェラって……んぐぐっ……むふぅっ！」

唇を強引に押し開き、異臭を放つ肉棒が押し込まれてくる。

（汚いっ！　ああ、なんてこと……いやあぁぁぁっ！）
最初にその熱さに驚かされ、続けてツーンと鼻を突く異臭に悩乱させられた。
「う……ぐっ……ぬ、抜きなさい……こんな不潔なこと……うう……許ヒません……ふぅむぅ……ンあぉぉっ」
男性器に口をつけるなど、ブリュンヒルデにとっては信じられない背徳行為であり、全身の血が逆流する恥辱だった。吐き気で胃がねじ曲がりそうになり、食道の奥が胃液に焼けた。
（くさいっ……汚いっ！）
なんとか吐き出そうとするのだが、術に掛かった身体は動かせず、顎にも力が入らない。穢れを知らない唇が、ロキの思うがままに蹂躙されていく。
「人間の男と女なら誰でもやってることですよ。フヒヒ」
ロキは嘲笑いながら、ゆっくりと腰を前後に振り出した。
「ん……むぐっ……ひゃめ……うぐぐ……おぇ……くぅっ」
「おお……いいですねえ。そうそう両手は背中で組んでくださいね。そのほうが気分が出ますから」
「そんなこ……うううぅむっ」

どんなにイヤでも両手は命令通りに背中に回って交差してしまう。
その間にも巨根がゆっくり食道近くまで押し込まれ、そこから反転して抜け出る寸前のカリが唇を捲り返らせる。
抜き差しされるたび舌の上をおぞましい肉塊が往復し、剥がれた恥垢が口中に広がって唾液と混ざり、舌が腐りそうな汚辱を味わわされる。
「んぐぐ……くるし……はむぅ……きたない……ううっ」
吐き気に何度も襲われ、全身の毛穴が開いて汗が噴き出す。ブリュンヒルデにとって初めて味わう、最悪の味覚だった。
「おおおっ……これが姫様の唇……温かくて……ヌルヌルして……くうっ……気持ちイイッ」
王女の苦悩を余所に、ロキは気持ちよさそうに恍惚(こうこつ)の表情を浮かべ、涎まで垂らしている。快感の大きさを表すように、肉棒が口の中でいっそう大きく勃起した。
(くっ……よくもこんな……キスだってしたことないのに……)
かつて使用人だった亜人に唇を穢されて、大人しいブリュンヒルデもさすがに激昂する。全身の血が沸騰するほど熱くなり、胸の奥で怒りの炎がメラメラと燃え上がる。その影響だろうか、指先の感覚が少しずつ戻ってきた。

（術が解けかかっている？　これなら……）
自分はアスガルドでも最高位の女神である。その力を完全に封じることなど、簡単にできるはずがない。今は堪えて、やがてくるチャンスを待つのだ。
「はあっ、はあっ……姫様のお口、最高ですよぉ……おおぅ……そろそろ……出してあげますからねぇ……ハアハアッ」
荒い息づかいを繰り返すロキが、上擦った声で囁く。
（出す？　出すって……何を……？）
性の知識がないブリュンヒルデはロキの言葉の意味がわからない。困惑の表情を浮かべていると……。
「ハアハア……もちろんザーメンですよ。フヒヒ……ただし、ただの精液じゃありません」
ブリュンヒルデの頭をガッシリと両手で押さえ込んだロキが、猛烈な勢いでピストン運動を開始した。
ジュッ……ズブブッ……グチュッ……ヌプヌプヌプゥッ！
「んっぐ……むぐ……ひゃめ……うぅ……おぉ……はぐぅ……っ！」
（いやっ……神族である私が……そんな穢らわしいものを飲まされるなんて……っ）
亀頭が高速で往復するたび、先走りの牡汁がまき散らされ、頬の内側や舌の上におぞま

しい牡の匂いと味とが擦り込まれてくる。それだけではない。禍々しい闇のオーラまでもが肉棒から染み出してくるではないか。あまりの気味悪さに吐き気がこみ上げるが、口を塞がれていては嘔吐することも許されない。

「ハア、ハア……俺の子種と同時にユミルの種子を埋め込んであげますよ。種子は姫様の身体の中で発芽し、聖気を吸収しながら全身に根を伸ばしていく……ハアァァ……やがて肉体のみならず精神も侵食していくのですよ」

「んぐ……ぷはぁ……な……なんレすって」

「しかも一度埋め込まれた種子は、取り除くことはほぼ不可能。フヒヒ、つまり姫様は、俺の忠実な操り人形になるのですよぉ！　死ぬまで永久にねぇ！」

死刑宣告とも言えるロキの言葉に背筋が凍りつく。もしそれが事実なら、ロキの支配から逃れることは不可能になってしまう。

「んっ、むっ……ひゃめ……ンおぉぅ……抜いてぇ……んぶふぅっ」

息苦しさで真っ赤に紅潮した美貌を小刻みに横に振るブリュンヒルデ。だがもちろん、そんなことで暴虐から逃れることはできない。

「んふふぅ……もっと舌を動かして……ハアハア……唇を窄めて……そうそう、その調子ですよ」

「いひゃ……んちゅ……うう……ぴちゃぴちゃ……舌がぁ……うぐぐ……んちゅ、くちゅぱぁっ」

（こんなこと……したくないのに……口が勝手に……！）

心の動揺が隙を作ってしまうのか、ロキの命令のままに身体が動いてしまう。無理矢理だというのに、操られた舌は的確に男の急所をくすぐってしまうのだ。

「はあぁ、はあぁ……素晴らしい……こいつはたまらん……姫様は……はあはあ……娼婦の素質がおありのようだ……くぅっ」

亀頭を包み込む淫らな温もり、裏筋をくすぐるいやらしい舌の蠢き。もちろん技巧自体は稚拙なのだが、高嶺の花である王女に淫棒をしゃぶらせているという優越感が男の劣情を刺激して、何百倍にも快感を増幅してくれるのだ。

「くははぁぁっ！　そろそろ射精しますよ……ハアハア……唇をもっと、タコみたいに突き出して……ククク……頬を窄めてチンポを吸うんです……そうそう……くははぁッ……すごい……なんてエロい顔だっ！　オーディンの野郎に見せてやりたいですよぉ！」

「んぶっ……じゅるるっ……ひゃうン……くちゅるぅっ……んむぅっ！」

口の中で勃起がピクピクと痙攣するのを感じて、ブリュンヒルデは絶望の戦慄きに全身を身震いさせた。

（ああ、いや！　お口に……射精されてしまうっ！）
穢らわしい男の精液を飲まされるなど、女神にとってこれ以上の屈辱はない。しかもそれはユミルの因子に汚染されており、ブリュンヒルデにとって絶体絶命の危機なのだ。全身全霊の力を振り絞って、僅かに頭を後退させる。
「無駄無駄ぁ！　姫様は俺のチンポから逃れられないのですよぉっ！」
逆に金髪を引き扱かれて股間に頭を密着させられた。ゴワゴワした陰毛が顔面に擦りつけられ、喉の奥、食道付近にまで亀頭先端が押し込まれる。
「ハアハア、もっと思い切りしゃぶりつきなさいぃっ！　くぉ……チンポが……溶けそうだっ」
チュパッ……チュパッ……クチュルルゥウッ！
命令通り頬がくぼんで、バキュームフェラを開始する。断続的な吸引の快感が蜂蜜のように海綿体に溶け込み、牡の官能中枢を暴走させた。
「オオオッ！　くらえぇぇぇっ！」
輸精管がヤケドするのではないかと思うほどの熱い迸(ほとばし)りが、ロキの剛棒の中を一気に駆け上がる！
ドビュッ！　ドビュッ！　ドビュドビュドビュゥゥ〜〜〜〜〜〜ッ！

「ンぶぶぶぶぅぅっ！　ふぐぅぅ～～～～～～～っ！」

マグマの噴火のような汚濁を流し込まれて、悶絶するブリュンヒルデ。口中に燃え広がる灼熱と潮苦い味に舌が痺れ、強烈な異臭に鼻がツーンと痛くなる。

（い、いやあぁぁぁぁぁっ！）

全身の毛穴が拡がって冷たい汗がドッと噴き出す。大量ザーメンでほっぺたがいっぱいに膨らんで、美貌を惨めに崩壊させていく。

「はあぉぉぉ……飲みなさい、姫様ぁ！　お、おぉ……一滴も零しては……いけませんよぉっ……ハアァァッ！」

「う……うぐ……んくっ……舌が……ぅあぁぁ……動いて……ごくっ……ごくっ……ごきゅん……っ」

意志に反して舌がザーメンを送り込んでしまう。腐った卵白のように重くドロドロとした粘液が喉をネットリと滑り落ちていく感覚は、最低最悪のおぞましさで、いっそ毒を飲まされたほうがマシだった。

（うあぁぁ……入ってくる……私のお腹の中にぃ……っ）

ザーメンとともにどす黒く邪悪な何かが、侵入してくる。それは猛烈な邪気を放ちながら食道を下って、胃の中にドロドロと溜まっていく。

（だめ……これ以上飲まされたら……っ）
身体の内側から闇に侵食されていくのがわかる。肉体にとどまらず、ブリュンヒルデの霊体にまで黒い根が伸びてくるのだ。
「くははっ。身体も精神も変わっていくのがわかるでしょう！　まだまだ出しますから、たっぷり飲んで、俺の人形になってくださいねぇ！　ヒャヒャヒャッ」
勝ち誇ったように嗤いながら、ロキはさらなる射精をブリュンヒルデの喉奥に送り込む。粘っこい牡精があたかも意思を持っているかのように、食道へと侵入し、飲みきれなかった一部は細い触手となって鼻腔にまで逆流した。
（そんな……頭の中にまで……）
鼻の奥にまでザーメンを満たされ、白い鼻水と涙がポロポロと溢れ出した。
「んぐっ……こわれりゅぅ……むぐぅぅっ！」
脳内までザーメン漬けにされるような錯覚に襲われ、ブリュンヒルデは眉間を打ち抜かれたように首を仰け反らせた。たわわな乳房がタプンッと跳ね上がる。
（ああ……）
喘ぐ唇の端から溢れた白濁がドロリと顎から喉に伝い落ちていく。おぞましいはずなのに、奇妙な恍惚感に意識が呑み込まれ、朦朧（もうろう）とする頭の中にロキの嘲笑だけがいつまでも

響いていた。
「フウゥ、最高でしたよ……フフフ。どうです姫様？　俺の操り人形になった気分は？　嬉しいでしょう」
「あ……あうぅ……は、はい……ロキ様の……あ、操り人形に……していただいて……ああ、いや……う、嬉しい……うう……です……あううっ」
朦朧としたままブリュンヒルデは答えていた。
（ちがう……そんなこと……思ってないのに……）
まだ自分の意識はあるのに、まるで他人の身体のように言うことを聞かない。目の前の男に絶対に逆らってはいけないという声が頭の中で響き続けるのだ。
「ふむ、まだ完全ではないようですが、まずまずといったところでしょう。これから俺の精を撃ち込んで、もっともっと完璧な牝奴隷に仕立ててあげますからね。さあ、お清めをしながら、今後の打ち合わせをしましょうか」
「うう……いや……はい……ああ、いやぁ」
屈辱の涙を零しながら、白濁の残滓（ざんし）が粘る異形男根に舌を這わせ始めるブリュンヒルデだった。

自分の姿を見て驚愕の声を上げる。ベビーボンネットが頭を飾り、首にはよだれかけ、そしてお尻にはオムツまであてられていた。これではまるで赤ん坊ではないか。

「大臣に責められて、お嬢様が父性に弱いことがわかりましたからね。これから俺の赤ちゃんとして躾なおしてあげましょう。ハックッ！」

「うあぁぁっ！」

ロキの赤い眼光がアナスタシアの視神経を経由して脳髄を麻痺させる。かつてなら軽減できたのに、今はほぼダイレクトに術を食らってしまう。

「うう……こ、こんなことでは……ま、負けまチぇん……あううっ」

いつの間にかしゃべり方も舌足らずな、幼児のように変化していた。

「ヒヒヒッ。どんなに足掻いても無駄ですよ、お嬢様」

「うう……む」

唇を奪われ、声までも封じられる。屈辱的なのに、まったく抵抗できない自分の身体が情けなかった。

「フハハ、パパには絶対に逆らってはいけないのですよ」

暗示にかけるように囁きながら覆い被さってくるロキ。股間にはどす黒い巨根が勢いよく起立している。血管が這い回り、醜い肉イボがいくつも突き出し、饐えたような異臭を

放っていた。

「うああ……こ、こないで……くだちゃい……あああ」

それを見た時アナスタシアの心に湧き起こったのは、怒りでも悔しさでもなく、恐怖だった。精神退行の影響が出ているのだろうか、大人の男が恐くて身動きできなかったのだ。

「パパの愛情が欲しかったのでしょう。フフフ、俺がタップリ注いであげますからねぇ」

「あ、ああ……」

オムツには底に開口部があり、そこからロキの剛棒が無毛のスリットに押し当てられた。アナスタシアの処女はもはや、風前の灯火だ。

「いやいやっ、やめなちゃいッ！」

必死になって小さな拳を叩きつけても、胸板に簡単に弾き返される。拳の痛みに完全に非力な存在に堕とされたのだと思い知らされた。

「無駄だと言っているでしょう。悪い娘にはお仕置きですっ！」

儚い抵抗を押し潰すように、ロキが剛棒を突き立てる。ラビアが無残にも押し広げられ、幼粘膜が限界まで拡張されていく。

ミチミチィィッ！　グッチュンッ！

「あきゃあああぁ〜〜〜〜っ！」

激痛におとがいを突き上げ、悲鳴を噴き上げるアナスタシア。ロキに敗北したという実感が、肉体の痛みを何百倍にも増幅し、魂を切り裂いていく。か細い太腿に破瓜の血が赤く無残に散った。

「ひゃはぁっ！　ついにお嬢様の処女膜も、ぶち抜いたぜぇッ！」

ブリュンヒルデとアナスタシアという二大女神の聖域を征服した悦びで、ロキは異様な興奮に包まれた。鼻息を鳴らし、さらに深く勃起をねじ込んでいく。

「ンあああぁ……い、いたい……いたいぃぃっ！　あっくううっ」

目尻の端に涙の粒を光らせ、童女のように苦痛を訴えるアナスタシア。普段なら絶対に見せない弱々しい姿が、ロキの凶暴性を煽った。

「うほっ、入り口はキツキツなのに、中のほうは濡れ濡れのグチョグチョですよ。こりゃあ熟れてますなぁ」

入り口は狭く窮屈なのに、そこを通過すると途端にヌルッと蜂蜜の壺に突っ込んだような柔らかさに包まれる。

「ンあああ……う、うそでちゅ……はうっ！」

処女を失ったばかりなのに、熟れているハズがない。だがズブズブと抜き差しされて感じるのは、苦痛を遥かに超える快美だった。

（ど、どうちてぇ……）
混乱と錯乱で首を左右に振りたくる。銀髪が波を打ち、甘酸っぱい少女の汗の芳香がムンムンと匂い立つ。
「お臍から埋め込んだユミルの根がお腹全体に拡がっているということですよ。フヒヒ、こうなればもう絶対に取り除くことはできません」
満面の笑みを浮かべ、最奥にある乙女の子宮めがけて強烈な杭打ちをズブリと埋め込んだ。
「あひぃぃ〜〜〜〜〜っ!!」
身体を真っ二つに裂かれるような衝撃と同時に、身体全体が浮き上がるような浮遊感に襲われる。精神を追い越して肉体だけが遥かな次元へと飛翔する！　目の前で赤い火花がバチバチと散って……。
「あひっ……こ、これしきの……こと……な、なんとも……ンあ、あああ〜〜〜〜〜ッ！」
ロキの浅黒い身体の下でビクンッビクンッと白い裸身が痙攣する。両脚が突っ張って、つま先がキュウッと丸まった。
「っはあ……はあ……はぁぁ……っ」
陶然としたまま宙を見つめるアナスタシア。自分の身に何が起きたのか、わかっていな

いのだ。
「ヒヒヒ、もうイキましたか。初めて俺を受け入れただけでイクとは、よほど俺のことが好きなんですね」
「はあはあ……イ、イクって……はあぁ……ン」
意識が混濁し、さらに幼児化が進んだのだろうか。ロキの言っていることが半分も理解できない。ただ全身を包む心地よい虚脱感に、いつまでもこの身を任せていたかった。
「俺の……パパのチンポが好きだってことですよ」
「はあぅ……んちゅぅっ」
ロキに強く舌を吸われ、子宮をグイグイと突き上げられて、得も言われぬ幸福感がこみ上げてくる。
「ち、ちがいまちゅ……きちゃまは……父様じゃ……ありまちぇん」
蕩けそうな意識を奮い立たせて、なんとか抵抗するアナスタシア。ぼんやりした脳裏に浮かぶのは父オーディンの面影。それが唯一の心の支えだ。
「ほう、もう五歳児程度に知能が落ちているはずですが、頑張りますねぇ。こうでなくては面白くない。フフフ」
むしろ反抗を楽しむように、ニヤニヤ嗤うと、ロキは悠然と腰を振り始めた。

ジュブッ！　ジュブブッ！　グチュンッ！
「あ、あぁっ！　らめっ……お腹の中……あううっ……掻き混ぜないれぇ……ぬ、ぬきなちゃいぃっ！　ああっ」
幼児言葉で必死に反抗するものの、鋭角に突き出たカリに内側の襞を擦り上げられるたび、目も眩むような快美が駆け抜けて声が裏返ってしまう。出血はまだ続いていたが、溢れ出る愛液がすぐさま洗い流してしまう。
「ハアハアっ、ちっちゃい身体に熟れ熟れマンコ……お嬢様は最高のロリビッチですよ」
ユミルに侵蝕された蜜肉は極上の名器へと作り替えられており、貪欲に牡棒に絡みついては、精を搾ろうと食い締める。聖と淫のギャップが男の劣情を刺激せずにはおかない。
「うああ……わたし……そんなんじゃ……あ、ありまちぇ……あひぃっ」
言葉で否定しても、アナスタシアの身体を見れば発情しているのは明らかだ。ピアスを嵌められた乳首もクリトリスもピンピンに勃起し、赤く充血したラビアもスリットからはみ出す。限界まで拡張された膣穴からは、白く泡立った本気汁が溢れ出しているのだ。
「イク時はイクと言うんです。そおれ、ハック！」
「ああ～～～～っ！　そんなこと絶対、言いまちぇ……ンあああッ……イク、イク……イキまちゅう～～～っ！」

プシャアアッァッ！

がに股に広がった両脚を痙攣させ、牝潮を噴き上げるアナスタシア。どんなに抵抗しようとしても、幼児退行させられた心と身体では、太刀打ちできなかった。

「ハハハッ。もう潮吹きまで覚えましたか。素晴らしい赤ちゃんですね」

「はあはあ……そんな……」

自分の肉体の制御すらできなくなりつつあることに恐怖する。このままでは本当に無力な赤ん坊にされてしまう。

「もう剣の使い方も、魔法の唱え方もわからないでしょう？」

「はあはあ……え……そ、そんなことは……あ、ああ……？」

ロキの言うとおり、剣術も魔法も何一つ思い出せない。それどころか女神として大切な何もかもが喪失していた。

「さあ、もっともっと若返らせて、オーディンのことも忘れさせてあげましょう。何もわからない赤ん坊になるんですよ。ヒャヒャヒャッ」

「あ、ああ……いやぁ！　わ、わすれさせないれぇ……ンあぁっ！」

犯され絶頂させられるたび、愛する父の面影がぼやけていく。

（とう……さま……）

戦慄しながらも、肉悦の渦に飲み込まれていくアナスタシアだった。

「お父様」

「ブリュンヒルデ……ど、どうしたのだ？　こんな時間に」

深夜になって寝室を訪れた第一王女を見て、オーディンはゴクリと息を飲んだ。

（ブリュンヒルデ……）

軽装服の下からムチムチとした乳肉や太腿がはみ出し、表情も化粧をしているのか、どことなく色気を増したように見える。特に胸の盛り上がりは異様なほどで、胸当てを弾き飛ばしてしまいそう。

「じ、じつはロキ様のことでお話が」

「ロキ？　アイツがどうかしたのか」

「わ、私……あのお方にとても惹かれてしまって……け、結婚を前提に……お、お付き合いをしようと思っているのです……あぁぁ」

「な、なんだと⁉　馬鹿なことを言うんじゃない！」

つっかえながら驚愕の言葉を搾り出す娘に対して、オーディンは怒声を上げた。

「いくらこの国に貢献したとは言え、人間混じりの半神半人だ。そんなヤツに大事な娘を

やれるものか」

「だって……私のお腹には……あぁ……ロキ様の……あ、赤ちゃんが……いるんですよ」

苦悶とも恍惚とも興奮ともつかない複雑な表情。頬は赤く汗ばみながら、お腹を愛おしげに撫でる指先は小刻みに震えている。娘が何を考えているのか、オーディンにはまったくわからない。

「な、なんだと……おのれ、ロキの恩知らずめ、城から追い出して……」

「……お父様、ごめんなさい！」

「ぐっ⁉」

突然の奇襲に息を詰まらせるオーディン。鳩尾（みぞおち）にブリュンヒルデの剣の柄が食い込んでいるではないか。

「ブリュンヒルデ……」

哀れむような娘の碧眼を見つめながら、オーディンは意識を失った。

「ほおれ、潮を吹いてイキなさい。ハック！」

「あああぁっ！　イクッ、イクゥッ！　イキまちゅうぅ〜〜〜っ！」

何度目かもわからない潮吹き絶頂に追い込まれるアナスタシア。ベッドの上は大きな染

みが世界地図のように広がり、甘ったるい牝臭が部屋中に立ちこめていた。
「私が誰だかわかりますか？」
「ハアハア……あうっ……パ、パパ……でちゅ……」
ロキの膝の上で後背座位で犯されながら、弱々しく答える。連続絶頂とハックによる精神汚染を何度も何度も繰り返され、特徴的なアメジストの瞳は焦点を失って宙を彷徨(さまよ)っていた。唇も弛んで舌をはみ出させ、涎まで垂らしている。あの巨人族を震え上がらせた姫女神とは思えない、ただのか弱い童女であった。
「ククク。そろそろ頃合いかな」
アナスタシアの下腹の淫紋を見てニンマリと嗤うロキ。蕾のようだった紋様は、今では薔薇の花のように大きく開いている。それは子宮の改造が完了し、受胎可能になったことを意味していた。
「いよいよアナスタシアが、俺の子を……クククッ」
どうにも鼻持ちならない高慢な令嬢であると同時に、絶対に手が届かない高嶺の花でもあったアナスタシア。それがもうすぐ、自分のモノになるのだ。
「ロキ様」
その時ドアがノックされ、ブリュンヒルデが車椅子を押しながら入ってきた。車椅子に

は意識を失ったオーディンが座らされている。
「あぁ!? アナスタシア……こんな……まさか……」
ロキの膝の上で赤ちゃんのような格好でグッタリしているアナスタシア。その変わり果てた妹の姿を見てブリュンヒルデはショックのあまり正気を取り戻した。あの最強の戦女神と呼ばれたアナスタシアが、ここまで堕とされていたとは。
「うう……本当にごめんなさい、私のせいで」
「お嬢様も幸せなのですから気にすることはありませんよ。ではオーディンをベッドに寝かせてください。いよいよトドメを刺してあげましょう」
ブリュンヒルデは一瞬悲しげな表情を浮かべたが、すぐに諦めて命令に従う。
「フフフ、お嬢様も少し正気に戻してあげましょう。孕む瞬間をじっくり味わってほしいですからね」
ロキがパチンと指を鳴らした。
「あ……あぁぁ……とう……ちゃま……?」
自分の横に寝かされたオーディンを見て、もはや言語すらも忘れつつあったアナスタシアの瞳に、僅かに知性の光が蘇る。

第四話

「いよいよ結婚か」

花嫁衣装の美姉妹女神の前に仁王立ちしたロキがにやにやと嗤う。最高の知性と美貌を持つブリュンヒルデがペニスを、最強の剣と可憐さを兼ね備えたアナスタシアが尻の穴を、それぞれ舌唇で丁寧に奉仕している。しかも二人ともロキの子を孕み、今日は正式に結ばれるのである。これほど幸せな男がこの世にいるだろうか。

二人が身につけているのは純白のベールとロンググローブとガーターストッキング。本来なら純潔を意味する清楚な衣装だが、乳房と聖域は露出し大きな臨月のお腹も隠すどころかむしろ目立つようなデザインなのである。新たにお臍に追加されたピアスも卑猥で、二人が孕み奴隷に堕ちたことを証明していた。

「フフフ、たまらねえぜ。俺のチンポは美味しいですか、姫様」

「はぁ、あむっ……ロキ様……とっても、美味しいです……ちゅ、ちゅぱっ」

ズッシリ重い陰嚢を舐め回したかと思うと、チュパチュパと淫靡な音を立てて肉棒にしゃぶりつくブリュンヒルデ。肉体改造と調教により、かつての清純な法の女神はすっかり

従順なマゾ女神へと作り替えられてしまっていた。臨月を迎えたお腹は大きく膨らみ、それにつれて淫紋を刻まれた双乳もさらに肥大化、今ではHカップを超えているだろう。乳輪は手の平サイズに拡がり、ピアスを施された乳首も熟れたグミのように赤みを増して、常に母乳を滴らせているほど淫らに変わり果てていた。

「はあはあ、ロキ様のオチンポ……この世で一番好きです……あぁん」

上目遣いで媚びを売り、金髪を梳き上げる姫君。逆レイプで神兵たちの精を搾り取り、国中にユミルの毒を広めてしまったという罪悪感が彼女の心の支えを完全に崩壊させていた。どこか自棄になったようにすべてを諦め、もはやハックで操る必要もないほど従順な牝奴隷と化していた。

「お嬢様も俺のケツの穴が気に入ったようですな」

嘲るような嗤いを浮かべながらロキがアナスタシアに聞く。

「んっ……うう……はい……ロキ様の……お尻の……穴……と、とってもおいしいです……くちゅ……くちゅん」

悔しげに歯噛みしながらも、肛門に舌をねじ込んでいくアナスタシア。彼女のお腹も臨月妊婦だとハッキリわかるほどパンパンに膨らんでいる。母乳は出るようになっても、乳房はほとんど発育しないままというアンバランスさ。それでも身体全体にはしっとりと脂

肪がのって、柔らかさと丸みを増した妖精ボディは、ぬいぐるみのように愛らしい。
外見以上に内側も大きく変化していた。お腹の子が成長するに従って精液への渇望はますます強くなり、今では毎日三つの孔にロキの精液を注いでもらわなければ満足できない身体にされてしまった。
ブリュンヒルデと違って精神までは支配されてはいないが、肉体は完全に堕とされ、一日中でも発情したままいやらしい蜜を溢れさせてしまうほど淫らなモノに作り替えられていた。
（心が堕ちきるまであと一歩というところか、まあそれも今日で終わりだ）
未だに時折反抗を見せるアナスタシアだが、出産を経験させれば完全に心が折れるであろうとロキはふんでいた。そのために国民の前での盛大な出産披露宴を企画したのだ。
「ロキ様、そろそろ式に出発しませんと」
そこへ巨人兵が入ってきた。
「おう、待ってろ。一発抜いてからだ。さあ、どちらに飲ませましょうかねぇ」
「ああン、ロキ様……ぜひ私にザーメンをくださいませ」
「はあはあ……わ、私が……飲みます！　姉様にそんなことさせません」
姉妹は競うようにロキの腰にまとわりつく。互いをかばおうとしているのか、精液を欲

しがっているのか、どちらにも見える反応だ。
「フフン、そうですね……今日はおしゃぶりが上手だった姫様に飲ませてあげましょう」
「あぁ……う、嬉しいです、ロキ様」
ぎこちなく微笑みながら肉棒をくわえ込むブリュンヒルデ。その瞳はチラリと妹を心配そうに見つめている。

『私はどうなってもいいから、貴女だけでも逃げるチャンスを待って』
「……姉様」
姉の青瞳はそう語っているかのよう。奴隷に堕とされてもまだ妹を思う優しい気持ちは残っているのだ。ならば必ず助け出さねばならない。
「はあはあ……」
しかしアナスタシアの喘ぎは甘く切ない。
ここ数日、ロキがブリュンヒルデを犯す回数は増えており、対してアナスタシアは丸一日放置されることさえあった。それがアナスタシアの身体を気遣ってのことなのか、ブリュンヒルデのほうに惹かれているのかはわからない。
（いけない。私は……何を考えて……）

ロキに犯されないことは喜ぶべきなのに、胸が切なく締めつけられる。舌もアソコもお尻もウズウズ疼いて、精液が欲しくて仕方がなくなる。
「ククク、さすがロキ様だぜ」
「あのアナスタシアとブリュンヒルデをここまで仕込むとはな」
周囲の巨人兵たちが羨ましそうに舌なめずりしている。宿敵だった女神姉妹の堕落した痴態は、彼らにとって最高の見世物だ。全員が勃起しているのはもちろん、早くも扱いている者もいる。
「ほうれ、姫様。出しますよぉ」
「んちゅ、むふっ……ください……ふあぁぁ……あはぅん」
牡精を受けながらウットリと笑みを浮かべる姉姫。すぐには飲み込まず、口に溜めてじっくりと味わうのがフェラチオの作法だ。
「妹君にも見せてあげましょう」
「は、はい……見て……あはぁぁっ」
妹に向かって口を開けて見せつける。ドロッとした白濁が唾液と混ざって泡立ち、舌や歯茎に絡みついている。精の生臭い匂いも強烈だ。
「フフフ。飲んでいいですよ」

「ふぁい……ごきゅっ……ごくんっ……はあぁ、ロキ様、ありがとうございました」
「うう……」
唇を噛み、顔を背けるアナスタシア。美味しそうに飲み干した姉を見ていると、ますます胸が苦しくなって、焦燥感で居ても立ってもいられなくなるのだ。
（なんなのですか、この気持ちは……）
怒りとも悲しみとも違う切ない感情。その正体もわからぬままモジモジと腰をくねらせるアナスタシアだった。

「さあ、式場まで移動ですよ、姫様」
ロキが巨人化し、その巨躯でブリュンヒルデを背後から抱き上げ、真下から膣孔を貫いた。
「うあぁぁんっ！」
身体に合わせてペニスも通常の二倍ほどに巨根化しており、イボと血管が這い回る異形ペニスはまさに串刺しといった迫力で、姉女神を犯している。
「アナスタシア様の相手はその巨人です」
ロキの逸物に見とれていたアナスタシアに、屈強な筋肉質の巨人兵があてがわれた。姉

と同様、オシッコスタイルで抱え上げると、剛直を下から突き上げる。だが狙った場所は、アヌスであった。
「ンあぁ……そ、そっちはぁ……」
「出産前にサカるなよ、このメスガキが。おらおらぁ」
「ひっ……おしりぃ……あひぃぃっ！」
灼熱の質量が腸襞を押し分けて根元まで埋まり、子宮の裏にズンッとぶつかる。息が詰まるほどの逞しさだ。
（熱くて太い……でも……）
太さも長さも硬さも熱さも、ロキのモノには及ばない。後ろを犯されながらも蜜部に感じるもどかしさがアナスタシアを戸惑わせる。
「ああ、アナスタシア……大丈夫？」
「姉様……うう……へ、平気です……これしきのこと……ああぁ」
励まし合う姉妹たち。しかしロキに犯されている姉を見ていると、羨ましいという気持ちがふっとこみ上げて、アナスタシアの混乱に拍車を掛けた。
「フフフ、仲が良いですな。では出発。門を開けろ」
城門の巨大な扉が開かれると、そこには大勢の国民たちが歓迎ムードで待ち構えていた。

だが二人の花嫁の異様な姿を見て、歓声は一瞬にしてどよめきに変わった。
「なんだあれは？　ま、まさか、セックスを……」
「お二人とも……お腹が膨らんで……妊娠しているのか？」
「しかも相手は巨人じゃないか⁉」
　驚きの声と悲鳴が湧き上がる。なにしろ国中の尊敬と憧れを集めていた二人の姫女神が、丸々膨らんだボテ腹を晒し、あまつさえ巨人の逞しい巨根で串刺しにされているのだ。
「挨拶ですよ、姫様、お嬢様」
「うあぁん……み、皆さん……よく聞いてください。アスガルドは……巨人様の国、ニブルヘイムに……ああ……全面的に……降伏することを……アナスタシアが……ここに宣言いたします……あぁん」
「うう……国軍は解体され……国民の資産も……領地も……ああぁ……す、すべて没収……巨人さまに譲渡いたします……ああぁ……すべての男は労働奴隷……女は全員……性奴隷として……ああぁ……巨人さまに、ご奉仕すること……これがブリュンヒルデの定める、新しい法律です……あううぅ」
「な、何を言っているんだ、お二人とも……⁉」
「全面降伏だって……そんな馬鹿な！」

突然の敗北宣言に騒然とする国民たち。
「はあぁん……巨人様との友好の証として……ブリュンヒルデは、ロキ様と婚約いたしました。はあはあ、見て……ロキ様の赤ちゃんを妊娠した……は、孕みマンコを見てください」
ブリュンヒルデは両手を花弁に添えてサーモンピンクを左右に割拡げる。どす黒いロキの男根を呑み込んだ浅ましい牝孔が、国民の前に暴き出されてしまう。
「ほれ、お前も挨拶しろよ、メスガキめ」
「うああ……私……アナスタシアもロキ様と……こ、婚約いたしました……浅ましい臨月の……奴隷妊婦の……淫乱マンコも……ご覧になって……ください……あぁぁむ」
姉にならってアナスタシアも無毛のスリットを掻き広げる。清楚な無毛ワレメの内側には、妊娠してはみ出すほどに肥大化したラビアが、熟れた色合いを見せていた。
（ああ……恥ずかしいッ）
媚粘膜に感じる視線が、これまでの調教で植えつけられた被虐の性感を刺激してくる。どんなにいやでも肉体は勝手に反応し、淫らな蜜をジクジク湧かせてしまうのだ。
「アナスタシア様まで……そんな……」
「しかもお尻で、あんな太いモノを……」

女神姉妹の堕ちた姿を目の当たりにして、民衆は声を失う。絶対無敵、アスガルド不敗の象徴であったアナスタシアとブリュンヒルデ。その二人が同時に完全敗北するとは。
「見たか、お前ら！　これが巨人の力だ！」
「うおお、この国は俺たちが頂いたぁ」
そこへ城内に潜んでいた巨人の軍勢が雪崩れ込み、人々を襲い始めた。
「うわああっ！　巨人兵が！」
「た、助けてくれ、神兵はどうしたんだ！　ぎゃああ！」
「ギャハハハ、最高位の女神二人が堕ちたんだ。助けなんかくるかよ」
逃げ惑う人々に巨人の網が投げつけられて次々に捕縛していく。少数の男たちが反撃を試みるがまったく歯が立たず、逆に棍棒で殴り倒された。
「姫様がセックスで神軍を骨抜きにしてくれたおかげで、楽勝ですな」
「あ、ああンっ……そうです……ブリュンヒルデはオチンポ欲しさに国を売りました……ああぁンっ……ロキ様ぁ、いやらしいブリュンヒルデに……エッチなお仕置きを、いっぱいしてください」
涙をポロポロと零しながらも、首を反らしてロキと口づけをかわすブリュンヒルデ。その姿は、愛欲のために国を売った悪女そのものだ。

「へへへ、国民が蹂躙されるのを見ながら感じてやがるぜ。おら、お前ももっと気分を出せや」

巨人兵もアナスタシアを上下に揺さぶり、尻穴を犯し抜く。

「うあぁぁっ……やめ……こんなの、だめぇ！」

街のあちこちで火が上がり、男は抵抗できなくなるまで殴られ、女は次々に犯されていく。守るべき国を守れず、ただ見ることしかできない。悲哀と絶望の涙を流しながらも、捲れ返った桃色肛肉は巨根を嬉しそうに食い締め、媚粘膜は白く濁った本気汁まで溢れ返らせてしまう。

「アナスタシア……ああぁ……わ、私、もうダメ……あ、貴女だけでも、あうぅっ」

「うああ……ね、姉様……しっかり……まだ、負けては、いけません……あきゃんっ」

官能の激流に流されながらも、懸命に励まし合うアナスタシアとブリュンヒルデ。

「フヒヒ、ここまで堕とされてもまだ正気を保つとは、美しい姉妹愛ですなあ。ではこれから式が終わるまで、気をやらなかったら婚約を取り消してもいいですよ」

「うう……ほ、ほんとうですね……？」

アナスタシアはいぶかりながらもその言葉にすがるしかない。

「約束は守りますよ。しかしそれもいつまで続くやら。おりゃっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/